

金管楽器奏法における適性について ～身体的特徴とアンブシュアの関係～

The Optimal Body Characteristics for Brass Instrument Players The Relationship between Body Features and Embouchure

(2010年3月31日受理)

森 利幸 三川 美幸

Toshiyuki Mori Miyuki Mikawa

Key words : 身体的特徴, アンブシュア, 金管楽器奏法, 骨格, 歯並び, マウスピース

要 旨

金管楽器には、木管楽器などと異なり、その発音自体に身体を使用するという奏法上の特性があるため、個人の身体的特徴が大きく影響する。海外で活躍する一流の演奏家に日本人の金管楽器奏者が少ないことは、骨格や歯列の良さなどの身体的特徴が欧米人と異なることが関係していると考えられる。本稿では、金管楽器における奏法上の特性と身体的特徴との関係を考察し、日本人に一般的にみられる身体的な特徴を考慮しながら奏法指導を行う場合の問題点を明らかにした。

I. はじめに

近年、小学校に至っても管楽器アンサンブルが取り入れられるようになり、吹奏楽をはじめとして多くの人々が気軽に管楽器に親しむことができるようになってきている。形状の美しさや音色に魅力を感じるなど個人的嗜好によるものから、メンバー構成や学校の保有する楽器の在庫状況など、楽器を始めようとする理由は様々であろう。しかし、特に管楽器は、発音上の特性もあり、楽器の習得が難しい。身体的特徴に不適切な楽器選択が行われれば、その習得はより困難さを伴い、音楽を楽しむ以前に、音楽を奏でることが苦しみとさえなりうる。一方、適切な場合では、音を鳴らすことが容易となるため、早期に高度な技術習得を図ることが比較的容易になると思われる。

本稿では、管楽器奏法における特性をまず明らかにし、その特性からどのような身体的特徴が金管楽器奏者に適しているのかを検討し、さらに優秀な金管奏者の多い欧米人と日本人の身体的な特徴の差異に着目し、奏法指導

上における幾つかの問題点を明らかにしていくことを目的とする。そうすることにより、管楽器指導において適切な楽器選択に関わる指針が見出せるのではないかと考える。

II. 金管楽器奏法と身体的特徴との関係

クラシック分野において、国際的なコンクール入賞者に日本人演奏家が名を連ねるようになって久しい。また、海外の一流オーケストラでの彼等の活躍が目立つようになっている。しかしながら、その中でも多くは、弦楽器およびピアノ奏者であり、それに比べて管楽器奏者、特に金管楽器奏者が少ない現状である。この様な差異が生じている要因の一つは何であろうか。まず初めに、欧米人と日本人の身体的相違を考察していく。

一般的に金管楽器奏者は、唇が薄く、歯列の整った、堅強な骨格を兼ね備えている、いわば欧米人に多くみられるような身体的特徴を持つ者が、管楽器奏者の適性をもっていると言われている。西野¹⁾は、“金管奏者に

とって、極く基本的な奏法を日々安定させることは難しく、集中力を持ってしてさえも、例えば一週間目にして努力が無になることは知られたところである”と述べているように、金管楽器は、音楽を奏でる以前に、その技術の習得が難しいことが特徴である。そして、管楽器の中でも特に奏法上難しいといわれている。ホルンの習得においては、むしろ身体的特徴に依拠している部分が最も多いといっても過言ではないだろうか。しかしながら、シューラー²⁾に代表されるような理論書等においてアンブシュアと身体との関係について述べられることはなく、単なる経験論として語られてきているのみである。

アンブッシュア (embouchure) は、通常、奏法上の単なる口唇運動と、筋肉の運動として解釈されているが、吐息が一定の速度で唇を振動させ、ある音程を発声させるために保持された唇のここと、およびその周りの筋肉の位置や緊張状態にあることを指すもの¹⁾、口唇の表情筋肉と口腔内を表すものなど様々な解釈がある。本稿においては、奏法上の口唇振動運動とそれに付随する筋肉、口腔内も含めた身体的な特徴、および適切なマウスピース使用を含めての総合的な口唇周辺に関わる概念として扱うこととする。

金管楽器奏法と他の楽器との相違点は、音を作り出す作業を奏者自らが研究するという課題が与えられていることである¹⁾。つまり、発音体が肉体であるということが難しさの第一要因である。木管楽器などは、リードなどが発音体となるため、体格などの身体的な影響は、さほど問題ではないが、明らかに木管楽器と異なるのは、口(歯・唇)とその周辺の筋肉や骨格などによる、身体の要因がその発音に関わる影響の大きさである。そして、音の発生そのものの難しさのみならず、最大の課題として、音域の制覇における困難さも加わる。音を出すためのアンブシュアの形成も重要であるが、その次の課題として、個々の音を並べて音楽表現ができる段階に至るところで、すでに大きな壁が立ち上がるのである。

無論上述のような奏法上の問題は、適切な指導により克服することができるものではあるが、音を奏することを学習することだけでは、達成度にも限界がある。つまり、身体的な特徴そのものがその奏法において重要な素質の一つとなるため、適性な身体的特徴との因果関係においてその適性を備えている者が有利であり、結果的に

その習熟度に差が出てしまうということである。ここでは、楽器に対する身体的素質をもち合わせていないからといって、楽器を習得できないということを述べている訳ではないことを強調しておきたい。

前述のように、日本人と欧米人と比較した場合、ハンディとなりうる身体的特徴の差異はその奏法上において顕著に現れる。しかしながら、このような身体的特徴は、外科手術・歯科矯正治療など以外においては、改善不可能な要因であるため、これらの差異は必然的に演奏者として明らかなハンディとなるのである。そして、歯並びが悪いなど学生が管楽器を習得するにあたって不向きな特徴を生来備えている場合、演奏家レベルに達するには、かなりの困難をとめない、その目的を達成できないことがほとんどである。従って、指導者としては、身体的な特徴に適応した楽器選択を行えば、音を発生させる初期の段階での困難さを軽減させることができ、楽器習得に際して習得の充実度が大きくなるということを認識する必要があると思われる。

音の発生

音の発生には、唇の厚さとマウスピースの角度との因果関係がある。根本³⁾が述べているように、一般的なマウスピースを唇に当てる角度は、顔に対して垂直であることが理想的であるが、日本人を含めたアジア人の場合は、本来噛み合わせが欧米人と異なっているため、必然的に30度ぐらい下向きになる場合が多い。垂直に当てるほうが息の通りが真っ直ぐになるのだが、我々の場合は、音を発生させる必要からやむなく顔を下げざるをえない。つまり、歯に対してはマウスピースは並行にあてることが出来たとしても、この体勢では、息が垂直に通らなくなる。したがって、音の発生には、1)唇の厚さ、2)マウスピースの位置、3)歯列の良さの3点が重要な要素であり、マウスピースとアンブシュアのバランスが重要となる。呼吸法も音の発生に関わる重要な要素の一つであるが、ここでの言及は行わない。

Ⅲ. 理想的な身体的特徴と問題点

歯列の良さ

金管楽器奏者には、細かい歯が湾曲して綺麗に並んで

いるような、歯列の整った人が向いているといわれており、前述の一流の欧米の金管楽器奏者の多くも歯列が良い。国によって事情が異なるであろうが、例えば、欧州においては、歯科矯正治療は、保険適用が行われるので、歯並びが悪い場合、幼少時に治療を行うのが通常となっている。そのため、楽器を始める初期の段階で、すでに歯列の整った状態となっている場合が多いといえる。

一方、日本では、歯科矯正治療が一般的な治療として普及してきたとはいえ、口蓋裂及び顎変形症の場合以外には保険は適用されない³⁾。そのため、矯正治療には高額な治療費を負担しなければならず、虫歯のように簡単に治療ができるものではない。歯列がある程度固定される成人期を待ってから矯正治療を行う場合もみられ、幼少時に治療がすでに終了している場合ばかりではないという点においても、欧州と異なる事情がある。

また、矯正治療は、アンブッシュアの形成に深く影響を与えるが、その重要性に対する認識は薄く、金管楽器奏者への理解が深い専門医も少ないのが現状である。そのため、矯正治療と楽器習得時期が並行している場合には、音が出せなくなるなどの問題が生じ得ることもある。そのため、奏者としては、矯正治療に慎重にならざるを得ず、治療を断念する場合もあるであろう。

楽器は、歯にできるだけ垂直にあたるほうが望ましく、マウスピース接合の位置にも影響を生じるため、楽器を始める初期の段階において歯列がすでに整っているほうが適性があるといえる。

唇の厚さと顎骨について

唇の厚さは、音域の制覇に関連してくる。特に高音を生じるためには、小さなアパチュアを作り唇の緊張を保持し続けることが必要となる。比較的唇が薄いほうが、これを容易に行いやすい。そのため、前述の欧米人のように、薄い唇を持ち合わせている人達の方が、より奏法上有利であると考えられる。

次に、顎骨に関することについて述べると、それは演奏の持久力に関与している。欧米人と日本人で比較した場合、欧米人はしっかりとした大きな骨格を持っていることが特徴である。

その中でも、金管奏法において最も関係する部分は、顎骨と頭蓋骨である。堅強で大きな顎骨は、その周辺の

筋肉量もその大きさに比例しているため、緊張した状態を持続するのにより有利となる。そして、頭蓋骨の大きさは、楽器音が共鳴する度合いにも影響を与えるため、より容積が大きい方が共鳴する割合が増加するので、さらに適しているといえる。

従って、前述で述べてきたように、管楽器奏法には、理想的な身体的特徴が大いに関係しているといえるのではないだろうか。

IV. マウスピース選択の問題

いくら身体的特徴が適性であってもマウスピースが不適切だと全てが台無しになってしまう。ここでは、マウスピースに関連することについて述べる。

マウスピース

マウスピースを唇に当てる位置については、すでに研究がなされており詳しくは前述の西野の文献¹⁾に詳しいので参照されたい。彼は、幾つかの理論書やメソッドからの比較検討を行っているが、いずれにしてもマウスピースの位置についての研究に終止しているのみで、大きさについての言及をしていない。

これには、幾つかの理由が推測されるが、そもそも金管楽器が、西洋伝来の楽器であることが一番の要因であろう。多くの理論書やメソッドの多くが、1970年代に欧米の著者によって記述がなされていることから明らかに、その奏法技術に関連するものは、必然的に彼らの身体的特徴に付随して発展してきた経緯があるということである。

この頃のマウスピースは、選択肢が少なく小さいものしかなかったと考えられるが、ホルンやトランペットも本来唇が薄いという特徴を持ち合わせている彼らにとっては、無理なく唇が収まったはずである。そのため、そもそもマウスピースの大きさが適しているため、なんら問題はなく、その大きさについては言及する必要がなかっただけであるということなのかもしれない。

反対に、多くの書物においてマウスピースの位置についての記述が多くみられることは、そのことがいつの時代においても金管楽器奏者にとって重要な関心が払われていることを示している。近代金管楽器メソッドの礎を

築いたといわれているファークスは⁴⁾、トランペットやホルンなどの高音域の管楽器奏者が、マウスピースを毎日位置する場所に対して、如何ほど敏感であるかを指摘している。例えば、チューバでは1mm、トロンボーンでは0.2mm程度、その位置が異なっても、また、別のマウスピースに変えてみても影響がないといわれている。

しかし、前者は、鍍金部分をわずかにサンドペーパーでこすられても分かるほど繊細な違いを認識すると述べている。だからこそ、マウスピースにおける位置に関しての考察に、特に焦点があてられてきたといえることが納得できるであろう。

マウスピース選択において最も重要なことは、まず、その人が、適切に音が出せるかどうかである。当たり前のことであるが、当人にとって音が出せないものであれば、いくらその音色が気に入ったとしても、使用するに値しない。そのために、考慮されなければならないことは、マウスピースの大きさについてである。

一般的に唇が厚めであるという特徴を持つ日本人は、マウスピースの内径・外径の大きさによって、適切な位置にアンブシュアを形成する必要がある。そのためには、マウスピースの大きさを調整しながら、個人の特徴に適合するものを選択することが必要である。

現在、マウスピースの種類は、以前に比べて豊富になり、幅広い選択肢の中から、自分に適合する大きさのものを選ぶことが可能となってきた。しかしながら、実際には、音色や製造会社名で判断してしまう傾向がみられる。また、欧米人においては、前述のように元々演奏に適した身体的特徴をもちあわせているので、音を鳴らすことが容易にできてしまう場合が多い。そのため、自分の嗜好に沿ったものを選択するのではなく、そのサイズについても考慮することも重要であるという認識は、我々よりさらに薄いと思われる。

マウスピース選択を行う場合についての注意点を、靴の選択をする場合に例えると理解しやすいのではないだろうか。例えば、靴を選択する場合には、デザインや色にとらわれてしまい、結果的に自分の足のサイズに合わないものを選んでしまったとしても、無理に靴に足を入れることは可能である。また、小さすぎると履くことは不可能であり、大きすぎても歩きにくいという問題が生

じる。そして、そのような選択を行ってしまった結果、靴づれを起こしたり、どこかに痛みを発生させる原因ともなる。

従って、われわれが通常自分の足の特徴に最適な靴を選択するように、マウスピースを選択する場合においても、個人の唇の特徴とサイズに適切な内径と外径の大きさをもちあわせたものを探ることが、最重要課題となるのである。

V. 終 わ り に

本稿を通して、欧米人と日本人の体格の相違に由来するハンディと金管楽器奏法における特性を考察してきたが、身体的特徴がいかに関管楽器奏法において深く関りを持っているかを述べてきた。筆者の指導上の経験を振り返ってみても、このことは明らかであり、全くの初心者日本人学生の場合では、専門家の指導の下で楽器を吹いてみると、確かに薄い唇を持つ学生の方が、はるかに簡単に音が出やすいという傾向があった。また、より高度な技術が必要とされている高音域においても、初期の段階にありながら、高音の習得を容易に行うことが可能であった。この例からも、初期の段階において、すでに金管楽器奏者に“向き”・“不向き”があるといえるだろう。

しかしながら、前述の例のように、いくら学習者が身体的特徴を兼ね備えていたとしても、その副次的要因としてマウスピースの適性な位置への配置、マウスピースのサイズを選択などが行われるなど、総合的に正しい奏法を専門的な指導者が導くことが必要であろう。そして、初期の指導において、指導者が適性なアンブシュア形成を導くためにも、個々の身体的特徴を把握し、その重要性をもっと認識する必要があると思われる。

現在、教育現場においては、金管楽器指導者の不足⁶⁾が指摘されるようになってきているが、大学で音楽教育に将来携わろうとする学生や、本学科のように履修期間が限られている短期大学等において、副科で金管楽器を履修する場合のように、上記のような身体的特徴を考慮した楽器を選択を行うことができれば、より高度なレベルへの達成を導くことも可能になるのではないだろうか。

今回、呼吸法に関すること及び、生理学的で専門的な視点からの身体的特徴に関して考察は行っていない。これらについては、今後の課題としたい。

参 考 文 献

- 1) 西野康博：金管楽器奏法の実験的考察, 徳島文理大学研究 (1987) 32, 157-165.
- 2) シューラー, G., 西岡信雄 訳「ホルンのテクニック」, 音楽之友社 (1965)
- 3) 根本俊男：「すべての管楽器奏者へーある歯科医の提言」(1988)
- 4) ファークス, F., 北村源三 訳 「金管楽器を吹く人のために」パイパーズ (1971)
- 5) 柴田恭典：あなたにもわかる, やさしい歯科矯正のはなし. 明倫歯科保健技工学雑誌(1999) 2(1), 64-69.
- 6) 新村元植：小学校における金管楽器指導の考察と実践, 鹿児島女子短期大学紀要(2004)39, 115-130.

